
魔砲少女の世界でデバイスショップ

只野飯陣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔砲少女の世界でデバイスショップ

【Nコード】

N1982BA

【作者名】

只野飯陣

【あらすじ】

無量大数の転生者、百貰える筈の能力を5つしか受けとれず、しかも戦闘に役に立たない才能が大半、そんな彼女がマジカルでリリカルな世界で転生者を釣りながら生きていく話し

ルーレットとか苦手何だ（前書き）

書き始めてしまった

ストーリー上クロスも歓迎

寧ろクロスしたくて書き始めた

三次創作も歓迎、むしろ狙ってた

一気に三話書いたが、分けた意味あったのかな

ルーレットとか苦手何だ

暗い……とてもとても暗い空間で俺は目覚めた。

辺りには光も無く、立っている感覚もしない、そんな空間に……突如として鳴り響くドラムロールの音色。

デュララララデュラン！…しゃん

最後の最後でバチがドラムの端に当たった間抜けな音を響かせるといふ、思わずずっこけたくなるような演出の直後に俺の居る空間がライトアップされ光に包まれた。

「おーめーでーとー」

「貴方は今回神のミス死亡事故無量大数突破記念の特別転生に選ばれましたー！」

「とーくーてーんー」

「ルーレットを回しますからダーツを投げてくださいーい！そりゃ！」

カララララ！

対照的な二人のバニー美女が交互に喋りながら俺に百本のダーツを渡してくる。

はつきり言っただけで理解出来ていないが、流されスキルEXは伊達ではない、ポカンとしながら全てのダーツを投げていた。

「oh……まさか百本渡して命中が五本だけとは」

「ノーコンー」

ほっとけ。

「しかも微妙なのばかり、家事の才能に音楽の才能、工学の天才に物真似の才能、唯一まともなのが召喚能力だけとか」

「きみーおわたー」

いや、説明してくださいよ。

「まあこんな運が無いのも珍しい、こうなったらとことん悲運を極めてきてくださいね！」

「いてらー」

は？

一気に視界が下がり一瞬で二人の姿が消えた。

ああ、落とし穴か、成る程把握、取敢えず最後に突っ込ませてくれ。

「無量大数ってどんだけミスしてんですか」

テンパって突っ込みどころ満載なのに突っ込みどころ間違っ自分が嫌だ。

異性で同性な同居人

俺は今、同居人の料理に舌を満足させながら愚痴を聞いている。

もはや二時間になるだろうか、赤ん坊の頃から意識があり、更には前世の記憶があると言う彼女は家事が上手く歌も聞き惚れる、所謂万能型な人間だ。

召喚術も扱えデバイスも自作出来るという何とも恵まれた女なのだが、如何せんストレスを貯めやすく流されやすい。

気が多いと言えば良いのか、家を出れば頼まれる事全てにイエスと答える。

そのせいで今や俺達のコンビは部隊内で便利屋扱いされている。やれやれだ。

「聞ってるのかハクタク！」

目の前で延々と愚痴を溢す女が机を叩いた。

右手に握られた一升瓶がチャプンと音を鳴らし、

「聴いてる、聴いてるから落ち着け」

適当に流しながら料理に視線を戻す。

やはり美味しい、今日も108部隊は激務が待ってるんだろうな、鬱だ。

サイド転生者

俺の愚痴を無視して黙々料理を食べ始める同居人を睨み付ける。

完璧に聞いてないだろ、これは。

暫く睨み付け続けたが此方を向く気配は無い。

俺は小さくため息を吐き出し外を眺めた。

俺は所謂転生者だ。

謎バニーに百本ダーツを投げさせられ五つの才能や能力を貰い、この世界に生まれ落ちた。

赤ちゃんの頃は意味も解らなくて良く泣いたな。ある程度身体が自由が聞くようになって、自分が女だと気付いた時にも泣いた。月のあれが来た時は大分女の生活に慣れてしまっただけだが、それでも絶望した。

それは最近の記憶だな、辛かったんだよ、妊娠とか多分死ぬよ、女って凄いな。

まあそれでも女の肉体に男の精神は何かと不便だ。

性同一性障害みたいなもんか？と思われるがあれは思考だけでは無くフォルモンバランスや何やらで拒否してしまう程になるらしい。生憎と完全に、フォルモンバランスや何やら肉体は完璧な女だった俺は恥ずかしいとは思っても拒絶はしなかった。

単なる女装であり、ファッションだと割り切れたからかもな。

まあ今では男の時より色々なジャンルの服に手が出せるからそれなりに楽しませて貰ってる。

お陰様で女として違和感が無くなったがな、畜生。

流されやすいからって肉体に精神が流されるって、俺は単純なのかもしれない。

「時間だ」

不意に、同居人であるハクタク・ウワラルクが席をたった。

俺は思考の海に沈んでいた意識をハッと引き上げ、彼の顔を見た。

「じゃあな、行ってくる、お前も無理はしないようにな」

そう言つてボフンと俺の頭に巨大な手を乗せる同居人を睨み付けながら、小さくため息を吐き出した。

「良いから行けよ、今日もどうせ激務だろ、遅刻すんぞ」

軽く手を振りハクタクを追い出すようにシッシツと言う。
それに苦笑を漏らしながら、ハクタクはその場を後にした。

「っ……さて、俺も働きますかね」

腕を伸ばし背の骨を鳴らしながら立ち上がる。

生活スペースからデバイスシヨップに続く扉の前で、軽く髪を結い上げ赤いエプロンをつける。

今日も平和に平穏な毎日を生きますかね。

「らっしゃーせー」

新聞を広げ最近の事件を流し読みしながら、店の扉が開くのに合わせて定型文を口ずさむ。

客は思い思いに市販のデバイスやデバイスパーツを探し店内を歩く。中にはカウンター隣の駄菓子凝視する青髪もいたが、一緒に居た茶髪の女の子に耳を引っ張られデバイスパーツのコーナーに歩いていった。

俺は欠伸を噛み殺しながら新聞を捲る。

最近は何事もなく新聞も話題性に欠ける。

まあ平和は良い事だから文句は無いのだが、どうも退屈だ。

軽く首を鳴らし、新聞をバサリと机の上に投げ棄てる。

と、丁度そのタイミングでさっきの二人組みが歩いてきた。

青髪の手には二世代くらい前の安いローラーが、茶髪は小型のアンカーワイヤーと巻き取りモーター、それに俺の自作の回路を数種持っていた。

「こんな古いローラーで良いのか？それに回路も、高いよ？」

何となく気になり聞いてみた。

士官学校の生徒なのか身体のおちこちに傷が見えるし、何より服装に遊びが少ない。

多分お洒落に使うお金をデバイスパーツに注ぎ込んだのだろう。

高いからな、デバイス。

「あつ……お金が足りなくて」

「このお店の回路は質が良いですし、妥当な出費ですよ」

タハハと笑い後頭部をかきながら答える青髪とは対称的に、茶髪はしっかり計画的に決めていたらしい。何とも凸凹な二人だ。

「ふうん……嬉しい事言ってくれるな、よっしゃサービスだ。こいつもやるよ」

やはり自分の開発したパーツを褒められるのは嬉しいからな、俺は立ち上がり試作の魔力刃整形機巧を取り出し茶髪の女の子に渡してやった。

「そ、そんなつ悪いです！」

慌てて手をふる茶髪を無視して、精算をすませた商品と同じ袋にぶ

ちこむ。

「ほら、遠慮すんなガキンちよが」

ニヤリと笑みを浮かべながら袋を差し出す。それで諦めたのか申し訳なさそうにしながら袋を受け取ってくれた。

「いーなーティアー」

と茶髪を羨むように見詰める青髪に苦笑を漏らしながら、ティアーと呼ばれた茶髪が何かに気付いたように辺りを見回した。

「そう言えば、今日は旦那さんはいないんですね？」

「ああ、あいつは局員だからな、仕事だよ、因みに夫婦じゃねえから、同居人」

俺はその質問には慣れたもので軽く流しながら否定する。

アイツと同居するようになってからこの手の質問は後を立たないからな、慣れたもんだ。

「ふうん……あつ、スイマセン長々と」

と、ペコリと頭を下げながら店を去る二人に軽く手を振りながら椅子に座り直した。

今日もデバイスショップ【トリッパー】は事も無し……ってな。

過去のあれこれ

俺は捨て子だった。

赤ん坊の頃から自我を持っていた俺は、若い頃は良く親を探してさ迷っていた。

名前も解ってたし、何とかなと思っていた。

施設を飛び出し夜遅くまで住民データと睨めっ子をするようになったのは五歳の頃から。

ネットカフェに籠り管理局にハッキングを仕掛け個人の情報を洗いざらい探した。

それで解った事は、俺を産んだ赤の他人はミッドチルダにはいないという、何とも絶望的な事実だった。

結局、俺は母親という他人探しを諦めその後の4年を歌を歌ったりレストランでバイトしたりして過ごす事になった。

この世界が子供でも働ける世界で助かった。施設は何だか息苦しかったし。

さて、そんな毎日をのらりくらりと過ごしてる内に五年の月日が経ち、俺はとある男と出会う事になる。

良くある転生者にとつての登竜門、他の転生者との会合だ。

最初は御互いに警戒しながら正体がバレないようにしていたというのだから笑える話だ。

どっちもバレバレやっちゅうの。

アイツとの出会いはバイト先のレストランで傷害強盗事件が起きた事が原因だ。

その時俺は間抜けにも厨房で鍋を振るのに必死で気付いていなかった。

全ての料理を片付け手拭いで汗を拭っていたら辺りが騒がしいのに気付いた。

何だ何だと野次馬根性全開でホールを覗いて目に入っただのは、何処

かで見たような夫婦剣を手に倒れ付した男と、顔を真つ赤にしながら男を睨み付ける女、更には壁にめり込む人相の悪い男。

まったく状況が解らないし、後で聞いても誰も呆れたような苦い顔をするばかりで答えてくれなかったから、未だ不明だ。

ただその夫婦剣を見た瞬間に男の正体に気付いた俺は慌てて隠れた。それを目敏く見ていた男も俺に不信感を持ったのか色々調べたらしい。

そこで御互いに転生者と認識し、警戒しあう毎日が始まった。馬鹿か俺達は。

暫くして、御互いに危険は無いと判断してからは和解し、更に奴からここがアニメの世界であるとも教えられた。

正直たいした興味も無かったが、男が原作で不幸になる人を救いたいから地球に行くと言った時は驚いた。

いや、男が地球に行くというのにはなく、地球が有ると言うことに。

探さなかったのかって？

多元世界がどんだけあると思ってんだよ、探す気何ぞ母親がミッドチルダにいないと解って諦めたって時点で解るだろ？つまりはそんな気はおき無かった。

まあかなり最初の二桁台の世界にあるらしいから探したらかなり速い段階で見付かったんだろうけどな。

それでも探す気はしなかっただろうな。今更地球とか言われても。とにかく、そこで初めてこの世界がアニメの世界だと解った俺は、とある壮大な目的を持つようになったんだ。

そう、自分の店を持つという。

料理店か音楽スタジオか、それとも機械弄りか悩んだんだけどな。料理何て毎日作れるし音楽とかはネット投稿や個人でジャケ売出来るだろ。

だからデバイスショップを始めようと決意した。

それに原作とやらを知ってる転生者を探しといってくれて、奴にも

頼まれたし。

だから俺の店、かなり突っ込み所が満載何だよな。

まあそのお陰で「ハーレムうつひよい」とか「俺最強www」とか抜かす馬鹿を大量に釣れたんだが。

うはは、ざまあ。

誰がお前らみたいな糞童貞に股を開くか、死ね、いやマジで。

視線がキモいんだよバハムート三兄弟呼ばれてえのか、サーヴァント召喚されてえのか、脂ぎった目で見てきやがって、サモナイト石無しでも出せんだぜ？

……………すまん、取り乱した。

いや、兎に角それ以来俺は自分の店を持つ為に金を貯めて本を買って転生者仲間のコネでカリム？とかレジアス？とかいう人の後ろ楯を得て店を開いた。

従業員の採用条件は転生者、もしくはトリップしてきた者とする。

とか普通に広告に書いてたりして、奴との約束も守った。

そのお陰で馬鹿を大量に釣れたし、気の良い転生者とも何人かと知り合えた。

それに毎日が充実してる。

この生活は捨てられなかったら無かったかもな、そう言う意味では、母親である他人なアイツにも感謝だな。

因みに、奴は悉く原作介入に失敗し続けて来たらしい。

不憫な奴だ。

日常1

「知らない天井だ」

「寝惚けるな」

ベコンとハクタクに頭を叩かれた。

音がヤバイよ、俺頭を抱えて悶絶してるし。

というか良く見たらハクタクが珍しくスーツを着ている。

コイツは真面目で確り者に見えて実はかなりだらしなく面倒くさがりだ。

朝ネクタイがズレてるなんてしょっちゅうだし、ワイシャツの後ろがはみ出してるなんて毎日だ。

猫舌で一口味噌汁を飲んで、熱さに驚き溢すなんて事もあるし、休日とは自宅でだらけてる。

基本、俺がいなきゃ駄目な奴なんだ。

そんなコイツがパリツとスーツを着こなす。ネクタイも問題なくワイシャツも入ってる。しかもよれてない。

胸ポケットにはちゃんと携帯灰皿を入れてるしハンカチにティッシュも持ってる。

ボサボサの髪もポマードで固めてる。

……何だか腹立たしいな。

「一人でそんだけ出来んなら毎日やれ」

そう言つて腰をパンツと叩くが、畜生まったく動じねえ。

やっぱり男と女の差なのだろうか。

「それはすまないが、一タチエックを入れなくても良いだろう」

と顔をしかめながら反論してくるが、甘いハクタク、お前は自分がどれほどだらしのない人間か解っていない。

お前のだらしなさは上げて行けば枚挙に暇が無いほどだぞ。

「で、何でスーツ何だよ」

「む……士官学校の卒業式がでな」

ああ、だいたいそれで解った。

どうせ良い奴は海に引き抜かれたから余り物の中の福を探しに行くとかだろ、陸は辛いねえ。

「そうかい、まあがんばんな、ハクタク陸曹殿」

と言いながらポンとハクタクの肩を叩く。

縞パンタンクトップとまあそれなりの格好だが今更過ぎてどちらも慌てない。

ハクタク何か叩かれた肩に手をやり深く溜め息を吐いている。そんなに勧誘が嫌なのか。まあ得意では無いだろうが。

「仕事だろ、諦める」

そう言つて壁に掛けられていたツナギ……オーバーホールを着込む。今日は頼まれていたメンテを全て片付けたいから店には顔を出せない。

だから店は真美ちゃんに任せる事になる。

因みに真美ちゃんは転生者だ。例の求人広告に釣られて来たらしい。しかもその目的が保護だと言っのだから笑えない。

管理局の闇を調べてる最中に「俺のハーレムに入れてやるよ」とか

ほざいたクソ気持ち悪い変態転生者に邪魔され、管理局に追われる身となったとか。

取敢えずその糞転生者はカスみたいな奴らしいから、屑に変えてやった。

男の転生者ってどいつもこいつも最低過ぎる。絶滅しろよって本当に……

悪い。熱くなった。

まあ兎に角、そんな経緯があって真美ちゃんはウチの店で働く事になったのだ。

「んじゃ、気を付けて行ってこい」

「あつ……」

それだけ言い残し俺は工房に姿を消した。
ハクタイの呟きとか聞こえなかった。

「俺の飯……」

聞こえなかったんだよ。

不本意な戦い

デバイスシヨップ何かやってると物騒な知り合いが増えてしまう。管理局しかり聖王教会しかり不良や犯罪者、転生者も、まあしかりだ。

そんな物騒な輩の相手を常日頃からやっていたらストレスも堪るし苛立ちもつのる。

「つーか帰れお偉いさん、部下が泣くぞ」

と、目の前で優雅に茶をしばく金髪美人なカリムさんを睨み付ける。前にも言ったと思うが、この騎士カリムはこの店を開くに辺り色々と便宜を図って貰った恩人の一人だ。まあ、それでも邪魔は邪魔なのだが。

「あら、良いじゃない、貴方が来ないから私から会いに来たのよ？」

と花が咲きそうな笑顔で返された。
へーへー美人でござい。

「営業時間外に来てくれよ……」

と激しく肩を落とす、店番をカツミとルードに任せるのは不安なんだ。

因みにどっちも転生者、シフトは昼から夜まで、働き物だが「のわあ!？」「ガシャガシャシャン」「カツミイイイ!」……ドジと五月蠅いのだ。

「相変わらず賑やかねえ」

と苦笑を漏らすカリム、クソッ様になる。
女の身である事が悔やまれる。

「んで、本題は？」

カリムに出された紅茶を飲みながら直球で聞く、俺とて暇ではないのだ。

「んっ……新しく部隊を設立する子が居てね、そこに技術協力と、後……生態ロストログア、欲望のメダルの回収……頼めるかしら」

素晴らしいご提案だなこの暴君は、恩もあれば義理もある、それに此処の自由も見逃して貰ってる。
拒否権なんか無いだろうに。

「行くしか、ねえんだろ？」

それに、生態ロストログアで名称が欲望のメダルとか……まんまアレだろ？転生者の可能性も高い。

「明日出る……ただし勘違いはするなよ、俺はお前の部下じゃない」

「解ってるわよ、頑張ってるね」

そう言うてにこやかに手を振る。
チッ、この親狸が。

今、俺は第7管理外世界に来ている。

文化レベルはDとかなり低いが、この世界には近年犯罪者が良く出入りするようになった。

その理由の一端が八年程前に起きた転生犯罪者事件が原因だ。

かつてこの世界に集まった様々な転生犯罪者が管理局転覆を企み、そして激しい戦いが起きた。

管理局側も大量の魔導師、転生者で包囲殲滅を行った。

……そこで出来た暗黙の理解、転生者を倒せるのは転生者だけなんだ。

結果、大量の転生者と魔導師を犠牲に、この事件は幕を閉じ、管理局上層部は転生者の存在を黙殺。

グレアムやカリム、ナカジマ、提督連中等の考えは珍しく一致した。転生者を自分達で管理……更に管理局に関しては従わない者は排除と言う方向まで話が進んだ。

貯まったものではないのは俺のような管理局にも関わらず、平和に暮らしたいだけの転生者だ。

俺の店を立てようと言う話も、管理局に所属していたあの奴がいなければ叶わなかっただろう。

アイツが顔が広くて助かった。

まあ……店を持つ条件に転生者の勧誘、もしくは捕獲を言われたんだがね。

「さて、過去を振り替えるのも飽きた、だから聞く、お前は転生者か」

崖の端に立ち雄大な大地を見下ろしながら、後ろに立つ男に聞く。

「はあ……あつ……あああ！」

涎を撒き散らしながら叫び、身体から大量のメダルを溢れさせその姿を異形の者に変える。

「……人の心も失ったのか？……まあ俺には関係無いがな」

口に加えていた煙草を模したデバイスを此方に向かってくる男に投げ捨てる。

俺特性の使い捨てデバイス【シガーレス】事前に入力された魔法の術式を発動と同時に解放する。

更に魔力は自前ではなく普段から空気中の魔素から取り込む為、俺みたいな魔力の少ない奴も安心だ。

召喚を素で行える俺には足止めに使い捨てデバイスさえあれば十分だし。

だから俺は専用のデバイスを持たずにこのシガーレスを大量に所持していた。

魔力が足りないのも、理由の一つだ。普通のデバイス使えないんだもん。

「あああ！痛い……痛いいい！」

シガーレスの爆裂に巻き込まれた男……グリードは叫びながらのたうち回り身体からメダルを溢していた。

「悪いな……せめて人として」

小さく呟き、男の前に立つ。

懷からシガーレスを二本取り出し、男の上に投げ捨てる。

バインドガ男に絡み付き、その動きを封じる。

「殺してやりたかったぜ」

軽く右手を掲げ中指と人差し指で挟んだシガーレスをポキリと折る。
シガーレスから漏れ出た魔力を収束し、召喚する。

「せめて楽に逝け」

そして、情けも無く様々な姿のイフリートが現れグリートの肉体を
焼いていく。

「……嫌な仕事だ」

胸ポケットから本物の煙草を一本取り出し、小さく呟いた。
焼け跡から二枚のメダルを拾い、封印術式を詰めたシガーレスを投
げその中に閉じ込める。

「せめて、理性があればなあ」

と、ぼやきながら俺はミッドチルダに帰った。
本当に、物騒な知り合いばかりだよ。

コラボ・D・5さん（前書き）

これはD・5さんの

魔法少女リリカルなのはStrikers へ転生したら魔法？がある世界だった
とのコラボです

D・5さんに許可を貰って書いています

コラボ・D - 5さん

その日は外が嫌に騒がしかった。

ハクタクから連絡が有り外で馬鹿な犯罪者が暴れているらしい。

正直……直ぐに鎮圧しに行きたかったが、転生者以外への武力行使は過剰戦力と取られかねない為、黙らす事も出来やしない。

ガチャガチャッ！！

小さくため息を溢し、地響きが興る度に荒れていく柵から剥き出しの回路などを回収しながらさっさと終わってくれと願っていると、突然ドアから音がした。

「クソッ！閉まってやがる！！」

面倒事は勘弁してくれ、内心そう思いながらドアまで行った瞬間に

……

「カカオちゃん退いて！オルアッ！！」 バコンッ！！

誰かにドアが叩か……蹴られたか体当たりされた。

しかも向こうの気配から察するに今度は人数を増やしてやるみたいだ。

「勘弁してくれ……」

深く息を吸い込みドアを開ける。

ドアから離れた先にいたのは今にも走りだそうとしている顔がそれなり整った赤い短髪の、活発そうなつり目の男と、金髪のさわやか

系イケメンだった。

「随分と強引な客だな」

苛立ちながらこの意見を口にしても許される筈だ。
ドアだって無料じゃあ無いのだから。

「頼む、デバイスを貸してくれ!!」

赤毛の男が突然頭を下げて来たが……正直かなり面倒だ。
それに俺の店はデバイスショップと銘打っているがその実態はパー
ツショップだし、置いてるデバイスは一見さん御断りなお手製最高
級デバイスばかりだ。

「いきなり不躰だな」

あまり面倒事に関わりたく無かったからつい突き放すように言っ
てしまった。

今更やり直す訳にも行かずシッシツと追い払うジェスチャーを追加、
だって何か癪だろ。

やるなら積極的に極端につ……てな。

「お願いです!!デバイスを貸してください!ダチのピンチなんで
す!!」

すると突然赤髪が地面に手を付き頭を下げてきた。

所謂土下座だ。ジャパニーズ文化だと思ったらミッドでも土下座は
あるらしい。

まあ地球出身の魔導師や転生者もいるんだから広まっても可笑しく
ない、土下座は日本の悲しい文化だ。

というかこれじゃ俺が悪役だ……勘弁してくれ、マジで。

「か、カカオちゃん……!」

何だか金髪もビックリしている

というかお前ら男通しでちゃん付けかよ、俺はそっちにビックリだよ。

まあ、理由は解った。多分嘘もついてない、だけどな……

「……帰りな」

それだけだ。

実力も解らない奴は信用できない、今コイツらが飛び出しても死体が増えるだけって可能性の方が高い。

武器を与えたら確実に死地に向かう、なら渡さない。

というかさつさとそのダチを連れてシエルターにでも行けよ。

「待ってちょうだい!!」

そう考え扉を閉めようとしたら、突然金髪が足を挟み込んで来た。

「……放せ、今は営業時間外だ……」

ああ、そんな目で睨み付けんなよ、何とかしてやりたくなるだろうが。

「話だけでも聞いてくれ!!」

金髪が無理矢理扉を開き叫ぶ。

瞳を目一杯に広げ、必死に声を飛ばす。

「チツ……さつさと話せ」
「まったく、話なんざ聞く気は無かったんだが、まったくもって若さに当てられたのかね？」

「私達は時空管理局の陸士候補生です！この状況の打破の為にこの店のデバイスを貸していただけませんかでしょうか」

……さて、どうするか。

コイツらの発言は一見正義に燃える若者のそれにも聞こえるが、実際には先に言ったダチを優先してるんだらう。
まあそっちの方が共感を持てるが……試すか？

「訓練生？……断る、訓練生は物陰に隠れている。それにいずれ管理局の武装局員が辿り着くだろ、それまで待てばいい」

俺の発言に赤髪が一気に顔を赤くして睨み付けてくる。

「不躰な要求なのは分かっています！ですがこの騒動の犯人の進行方向には避難用シエルターがあるんです！」

金髪も赤髪の援護に入るが、まだ……弱いな。

「だから待てばいいだらう、それにシエルターは頑丈だそう簡単に壊されることは無いだらう……さつさと帰る……」

ガンッ！！

更に言葉を続けようとした所で、赤髪が一気に頭を下げ床に頭を叩き付けた。

「ダチが・・・あいつが俺達が来るのを待っているんです！！お願いします！！早く行かないとアイツがヴェントが死んじゃうんです！！！！お願いします！！デバイスを貸してください！！！！」

「お願いします！！私達の仲間が一人で抑えてくれているんです！」

「お願いします！！！！」

二人して同時に頭を叩き付ける。

正直、もう満足………というかそこまで覚悟してるんならデバイス無しでも飛び出しそうだ。

……でも、なあ？

今更さ、「実は君達を試していたのだよ」とか言ったら完全に寒いじゃん。

だからついつい渋々、本意ではないって態度を取っちゃった。

「……………チツ、ああ、そーいやハクタクの奴がエアコンの調子が悪いとか言ってたな」

何だコイツみたいな顔で赤髪が見てくる。

気付けよ、こんな三文芝居してる俺が恥ずかしいだろ、あー顔が熱い。

「俺が奥でエアコン直してる隙に工房に泥棒が入るかもな」

赤髪が怪訝な顔をしだした。

良いからさっさと持ってけよ！恥ずかしくて死にそう何だよ！

「！？」

どうやら金髪は気付いたみたいだ。

よしよし、解ったならさっさと工房に行け。

「……………店も荒れ放題だ、それに管理局に調べられても、盗まれたら諦めるしかないな……………ったく……………あ？まだいたのか、営業妨害だ、出ていけ」

そう言っただ店の奥に速歩きで引込む、正直顔の熱さが限界だ。つてあつ、クソツ……………焦って鍵が開かねえ、セキュリティとか気にしなきゃ良かった。

赤髪はまだ気付かないのか後ろから殺気混じりの視線を感じるし……………金髪は俺に頭を下げてから赤髪を引張って工房に入ってしまった。

「……………マジで、顔の火照りがヤバいな」

俺は二人が工房に消えたのを確認してから大きく溜め息を吐き出し、苦笑混じりに顔を手団扇で扇いだ。

「……………間抜けな泥棒にはさっさと出て行って貰いたいんだが」

入って直ぐに二人は出てきた。

俺は慌てて後ろを向き背中越しに、茶化すように言った……………んだが、顔の火照りやテンパリで無愛想になっちまった。

「……………ありがとうございます！！」

二人の礼を受け取り軽く背中越しに手を振る。
はあ……………かなり恥ずかしかった。

「……………てゆうか何で女口調だったんだ？」

そんな素朴な疑問に答えてくれる奴は一人も居なかった。虚しい。

コラボ・D・5さん（後書き）

D・5さんの

魔法少女リリカルなのはStrikers　〈転生したら魔法？がある世界だった〉
のURLです←

<http://nknk.s-yios.gethu.shicon/wng64て3wk/?れgunaidい>かn

楽しませて書かせて頂きました。

D・5さん有り難う御座います。

またこの話はD・5さんの作品本編のバトルの合間のサブキャラクターの行動に対する、我らが店長のサイドのお話です
どうしてこうなった。と思う方はD・5さんの作品を見てみてください
さい

ランの依頼1

何時もと変わらない日常。

窓の外には晴天が広がり、ビルに囲まれ……というかビルの間の路地にあるようなこの店にも光をもたらしてくれる。

立地は最悪だが隠れた名店だから良いんだよ、それに丁度路地のから出るのは自宅部分、店に入りたきや裏路地を回るしか無いという陰険設計。

それでも客足が途絶えないのは質が良いから、持ってて良かったデバイスマイスターの資格。

軽く首を鳴らしベッドからズルリと抜け出す。

普段と変わらずタンクトップに縞パンという色気が糞程も無い格好だ。

お洒落は好きだが、ありやあくまで趣味、普段は動きやすさ重視だぜ？

ブラとか着けなくても型崩れないし、任せて安心転生ボディってかとか戯れ言ほざきながら欠伸を噛み殺し、カーテンを開きハクタクの部屋に入る。

未だ夢の中の馬鹿を蹴り落とし、直ぐにキッチンに、朝の変わらぬ行動、平和が一番。

手早く料理を作り、ハクタクを送り出す。

その後は何時ものツナギを着込み店に向かう。今日は良い事が有りそうだ。

商品棚を一別しながら店舗スペースの入り口につき、シャッターを開くと同時に思わずシャッターを降ろしてしまった。

ガラガラピッシャン

そのまま深く息を吸い込み、そのまま吐き出す。

よし、落ち着け、こんな速い時間から店に来る馬鹿はいない、そう
だよ俺に用があるなら裏口から来る筈だ。

そう自分に言い聞かせ、またシャッターを開く。

そこに居たのは無駄に綺麗な歯を見せ付けるように笑みを浮かべた、
銀髪オッドアイの典型的な転生者だった。

因みに俺は苦笑。

「……入るか？」

流石に店の入り口に立たせとくのもあれなので店の中に招き入れる。
こんなのが店頭にいたらカーネルサンダースがマクドナルドに置か
れるくらい不気味だ。

「……はい！」

元氣良く返事をしてくるがどう考えても間が開いただろ、何だよ。

「それで、ご用件は？」

カウンターに背を預け、腕を組み銀髪を見据える。

何かが思惑通りに行かなかったのか困ったような思案顔だ。

「……えつと……ハハッ」

と言ってまたニコツと笑い掛けてくる。

顔が火照ってくる。

殴りたい程にムカツク、質問に答える。

「どうしました？顔が赤いですよ？」

とか聞いてくるが、良いから質問に答えろ。
シガーレス口に突っ込むぞ。

「で、お前は誰なんだよ」

不毛だ。

というか大体解ってる。

どうせニコポとかナデポを持った転生者だろ？

何人めだろな、ニコポナデポ……

この転生得点はハーレム製造能力と思われてるが実は違う。ただ顔が火照るだけだ。

惚れるわけではない、クソ使えねえ、ざまあ。

「えつと……あの……ハハッ」

睨み付けると明らかに動揺しながら微笑み掛けてくる。

アホか、ニコポナデポを知らなきゃその無駄なイケメンフェイスで勘違いされるかもしれんがな、俺は長年転生者と関わり続けて来たんだぞ。

今更そんな勘違いするか、中身は男だし。

「えつと……貴方は転生者ですか？」

俺がシガーレスを弄び始めると明らかに狼狽えだした。

いや、名前、あと目的、答えろや。

「そつだよ、お前は？」

「……………」

いや、黙んな。

何か、お前は俺を惚れさせたいが為にワザワザ此処まで来て微笑んだらポツ好きっ抱きつとでもなると思ったんか。死ね。

んでもってあれか、惚れさせる自信があったから裏設定も考えて無かったと。死ね。

つつか此れは完璧にアレだろ、クズ（ハーレム系転生者）だろ。死ね。

「よし解った。名乗るな、喋るな、大体解った」

害虫は駆除しなければ。

というかそろそろ開店時間だからこんな奴いたら邪魔だし。

「じゃな」

転移の術式を封じたシガーレスを投げ付けどっかの管理不可世界に投げ捨てる。

「えっちよっ…まっせ」

死ねば良いよ。

多少不快な思いはしたが本日もトリッパーは平常運転。

レジの前に座りバサッと新聞を広げる。

馬鹿どもが機動六課とやらに入りたがったせいで社会現象扱いされ

てやがる。馬鹿しかないのか？

下を見れば何故か管理外世界の喫茶店の広告、管理局以外いけねえだろ。

横に視線をずらす。テロ予告の記事が載ってる。

知り合いの転生者が捕まえた転生者を解放しろと喚いているらしい、とゆうか転生者問題起こしすぎだから。品位を疑うわー。

ふと視線を感じて顔を上げてみる。

黄色が居た。正しくは黄色を背負った女が居た。

「ランか、どした？」

直ぐに視線を新聞に戻す。

あの尻尾は魔性の尻尾だから見たら行けない、明らかにいつか見た青髪が抱き付いてるし。

「デバイスを造ってくれ」

そう言つて札束をボトリと落とす。

思わず口にくわえていたシガーレスを落としてしまう。

クレジット使え。

「……いつまでだ？」

札束をガツと拾いいそいそとカウンター裏の金庫に入れる。

浅ましい？黙らっしゃい。

「三日だ、クロノに転生者捕獲を任された」

そうかい、クロノが誰かは知らんが。

眉根を寄せるランからするとあまり好きな奴では無いらしい。

因みにこのランは狐尻尾にモフりたいという理由だけでこの姿にな

った馬鹿だ。

しかも尻尾があっても自分についてるからモフれないと愚痴ってる。阿呆だ。

「三日か、急だな、リンカーコアのデータ今日中に持ってきてくれ」
しっかりと金庫の鍵をかけ立ち上がる。

ランが何かの書類をバサリとカウンターに置いたのを見つめ小さく喉を鳴らす。とゆつかヒクツとうわづいた、
身体情報、レアスキル、そこは良いが趣味や経歴はいらんだろ。
やっぱり馬鹿だ。

「あー、今から取り掛かる、二日後に来てくれ」

書類を手には下がる。

ランが何かを言いたそうにしていたが無視する。

さて、工房について真っ先に行うのは特性デバイスの肝である回路造りだ。

基盤は飾りだ。とは言わないが回路回りが悪いと転生者の得点能力に耐えられないのだ。

なまじっかインテリジェントデバイスを求めるからそうなる。

人工知能何てただでさえ複雑なのに、理の違う力进行处理できる筈がない。

だからオーバーヒートを起こしにくいように回路はかなり気を使う。
排熱機構のに効率的に熱が向かうようにしながら、データの移動にも損傷が無いように。

しかも待機状態でそれを造るのだからかなり精密な作業になる。
顕微鏡を通してロボットアームで回線を繋ぎ並べていく。
熱電導率が高いと排熱が間に合わないから銅は使わない。

無人世界の鉱石を溶かし配線に組み合わせる。
氷燐石という冷たい石だ。

頑丈で電導率が高いから重宝する。高いけど。
回路、配線の工程が終わったら次は基盤だ。
インテリジェントデバイスのインテリジェントたる所以の人工知能
もここで造る。

まあ武器に知能とか俺に言わせりゃナンセンスだが、客が求めるな
ら造るぜ？最高のAIをな。

まあ人工知能の分類はOSだから実は苦手なんだが、処理速度は出
来るだけ高める。

結果クーデレなAIが出来上がる。

喋れや意味ないだろとか言うな、会話に処理回すなら計算してる。
インテリジェントデバイスは自己計算出来るから重宝するんだよ。
と、俺がパソコンに向かってカタカタしていると突然肩を叩かれた。

「……休め」

後ろを振り向くとハクタイが呆れ顔で睨み付けてくる。何だこらハ
クタイの癖に。

「今何時だ？」

と、肩をグルリと回しながら聞いてみる。
少し前に入れた筈の珈琲が冷めていた。

「三時だ」

どうやら六時間も籠っていたらしい。

「そうかい……後二時間やったら飯造ってやるから待ってる」

首を鳴らしながら立ち上がる。

ポケットから煙草を取り出し火を付けた。

紫煙がフィルターを通り肺に流れ込んでくる。

少し喉がイガイガしたから珈琲を飲み干し図面を片付けた。

しつかり片付けないとハクタクが五月蠅いのだ。ハクタクの癖に。

「……はあ」

ハクタクが何かを諦めたかのように溜め息を吐き出した。

どうでも良いが帰りが速いな、何かあったのか？

「……速く来いよ」

それだけ言い残し生活スペースに消えるハクタク。

俺は首を傾げながら片付けを再開する。

……途中でアイディアが浮かび図面を引っ張り出し書き加えていた
らハクタクに怒られたのは完全に余談だ。

ランの依頼2

三時間程してから生活スペースに戻るとハクタクの他に真美ちゃんやルード、カツミ等のアルバイト組みも揃っていた。

「どうかしたのか？皆して」

全員ニヤニヤしてんのを不思議に思いながらいつもの感覚でツナギを脱ぎ捨てる。

まあいつも通り色気の無い縞パン何だがカツミとルードは身を乗り出して来て真美ちゃんに殴られていた。

いや、解るぞ二人とも、俺でも乗り出す。

ハクタクが異常なだけだ。

「で？結局こりや何の集まりだよ」

「先ずは服を着てください！」

ハクタクに質問しながら椅子に座り缶ビールを開けたら真美ちゃんに怒られた。

あつ、缶ビール取り上げな……はい、ごめんなさい。

「嫌だな店長今日は店長の誕生日じゃないでsぶげっ！？」

ニタニタ笑いながら歩いてきたカツミがツナギから落ちたネジを踏みつけ豪快に滑った。

「カツミイイイイ！大丈夫か！返事を……カツミイイイイ！」

それに慌てて駆け寄り助け起こすルード、うん、五月蠅い。

「あつ……あの人もプレゼント預かってますよ」

と真美ちゃんは我関せずでプレゼントを渡してくれる。

あれ、本来なら誕生日ですよで「え？……あつ！」でビックリするべきなのに、バイトの個性が強すぎてまったく驚け無かった。まあ今更だが。

「ああ、後で礼しなきゃな」

良く考えたら色々プレゼントらしき物が置いてあつたな、三日前から。

ていうかごく自然ソファの横に会ったから放置してた。隠せよ。

「さて、それじゃあ今日は無礼講ってな、皆好きに騒いでくれ」

全員が椅子に座つたのを確認してからグラスを持ち上げバースデーパーティーは開始した。

「あつ店長」

乾杯の直前に真美ちゃんが話し掛けてきた。何だ？

「服は着てくださいね？」

……はい。

後そのバイト二人はデバイス没収な、カメラ撮んな。

昨日の乱飭騒ぎから最初に抜け出して工房に入ったら寝ていたみたいだ。

毛布を掛けられ椅子に座って机に突っ伏していた。

ハクタクが掛けてくれたらしい。

傷む頭を押さえながら立ち上がり生活スペースに向かう。

破かれた梱包の紙や机に広がる汚い皿、床には空き缶や空き瓶が転がりカツミが床に頭を埋めていた。カオスだ。

どうせ空き瓶でも踏んだのだろうが、放置されるとかどんだけ日常風景何だお前は。

「……まあ良いか」

片付けが面倒だなーとか考えていたがしばらくして考えるのを止めた。

そもそも今日中にランのデバイスを作らなきゃいけないんだから片付ける暇何か無い。

ポポイと服を脱ぎ捨てツナギを着込む。

今日は鍔金作業もあるからしっかり上まで着て帽子も被ります。職人だろ？

「起きろ」

「うどっ！」

ゴスツと脇腹を蹴るとカツミの口から奇っ怪な呻きが漏れた。死ーんと静まり返る室内、動かないカツミ。

「いや起きろよ」

今度は尻を蹴飛ばす、もうちょい下を蹴ったら二度と起きなくなる。二重の意味で。

それで覚醒したのかズボツと頭を引き抜く。

流石は転生特典に【絶対的な防御力】を貰った男だ。まったく傷付いてない。

「あつ店長、ちわつす」

シュタツと右手を上げたカツミに折角だから店番を頼み工房に向かう。

今日はデバイスの本体を設計する。

形は綺麗な装飾を施されたスコップだ。

ランは土の性質変化を使えるらしいからな、これしか無いだろうってな。

「さて、やるか」

鋳金台のスイッチを入れる。

ギューイと音を立ててドリルが回転を始める。

それを板金に会わせ削っていく。

ミスリルと銀の合金、割合は2：8、ミスリルも銀も魔力伝導率が高いからデバイスの外装には良く使われる。

更に銀は柔らかくミスリルは硬い為、この二つを合わせると碎けにくく曲がりにくい合金が出来上がる。

砲撃魔法とか使って安物デバイスがひしゃげた何て話しは、実は珍しくない。

ミスリルと銀の合金で柄の部分を造り、中に昨日のように配線を入

れていく。

更に棒の部分は六角柱に、柄の中から伸びたケーブルを棒の部分から伸びるケーブルと繋げる。

因みに六角柱の柄側にはカートリッジの排出機構を取り付けている。カートリッジ差し込み口は棒の先端、スコップの柄の枝分かれている部分な、あそこの中心から入れる。

次は肝心の刃の部分。

ここは最も硬く作らなければいけないのでオリハルコンとヒイロカネの合金を試用する。馬鹿にならない程に高い。

合わせた後は絶対に溶けないからゴリゴリと同じ合金をまぶした鑢で光速で削っていく。

五秒おきに鑢を変えなきゃいけないとか、マジ鬼畜。

やっと形になったのを今度は三時間くらい掛けて機械にセットして刃を整形する。

溶かせたら楽なんだがね、どうもドラゴンのプレスくらいでしか溶けないらしい。

兎に角合金サンダーで削りまくる。

刃に波紋が浮き出てきた。遊び心の飾りだ。更に中心から切り分け刃を真つ二つ、無論合金の以下略だ。

それを蒸気圧で開閉出来るようにし、開いたら六角柱から砲撃が放てるようにした。

それらを組み立て、最後に待機状態の型を六角柱の柄真下に埋め込む。

ペカツと光ったと思ったらそこには小さなスコップを模したアクセサリーが浮いていた。

「っ…… ああー終わったあー」

背を逸らし伸びをする。

背骨がバキバキと鳴るのを無視しながら首を回す。

時計を見れば何と四時、どうやら八時間隠っていたらしい。

きゆう

そう認識した瞬間に腹が鳴った。

誰もいないのは解ってるが思わず辺りを見回す。

「……飯にするか」

最後に昨日組んだOSをインストールしAIを起動する。

データの読み込みを自動でやるように言い残し生活スペースに戻って飯を作った。

ハクタクはどうやら遅くなるらしいので先に寝る事にした。

翌日、俺はいつものツナギに赤エプロンを装着しカウンターに座ってランを待っていた。

店の扉を開き何人かの客が出入りするのを眺めながら欠伸を噛み殺す。

「らっしやーせー！」

ルードが無駄に声を張り上げる度に頭がズキズキと傷む。

集中してる時は平気だったのだが……どうやら完全に二日酔いになってしまったようだ。

ランに渡すスコップを弄りながら柵の整理をしている真美ちゃんを見つめる。

動きに無駄が無い、流石は【完璧で瀟洒な御奉仕精神】何て良く解らない転生特典を持つてる女だ。

戦闘には役立たないが、仕事をやらせたら誰よりも完璧にこなす、そんな能力。

真美ちゃんは転生当初敵対フラグを立てないよう必死だったらしい、まあ戦えないしな。

「さっしやーせ……ああ！エミヤさん！」

ルードがまた無駄にデカイ声で客を迎えた。
どうでも良いがさっしやーせって何だよ。

「御早うルード、因みに僕はエミヤじゃないから、覚えてね？……えっと……ああいたいた、ランからデバイス持ってこいって言われちゃって」

……そうか、パシリか。
まあそれは良いんだがな。

「お前確か今回こそ原作介入するとかって機動六課とやらに転属申し込んだんだよな？」

スコップデバイスを投げて渡してやる。
それを片手で受け取り首を傾げる奴。

「そうだと、何で？」

気付いてないのか、つくづく不憫な男だよ、お前は。

「……今日つて確かその部隊長に面会、面接するとか言ってたか？」

因みに約束の時間は一時らしい。

「……今何時？」

汗をダラダラ流しながら奴が聞いてきたから無言で腕時計を見せてやる。

そこにはデジタル表記で14:08と表記されていた。

「しまったああああ！」

叫びながら出ていく奴。

また原作とやらに乗りそびれたのか。不憫な男だよ、本当に、つくづく、な。

日常2

善人が皆まともとは限らない、人助けをするがクネクネとしか動かない奴もいるし、歩けばかならず転ぶ奴、五月蠅い奴、色々とタイミングが合わない奴、笑顔が無駄に怖い奴。色んな残念な善人がいるだろう。

そんな奴等の中で俺が一番対応に困るのは。

「貴方を愛しています」

こういうバカだ。

今俺の目の前、カウンターを挟んだ対面に陣取り俺の両手を握り締めているのはランド・セル・イヌカイという名の転生者だ。

無駄に切り揃えられた深緑の前髪が鬱陶しいし、目鼻立ちは整ってるが服装がどこかの騎士団の零の人みたいでかなりダサい。

残念なイケメンの二つ名を欲しいがままにしている。店に寄らないで欲しい。

気付いたらいつの間にか後ろに立っていやがった。

わざとらしく頭から血が飛び出しているのが腹立たしい。

「冷やかし御断り」

頭に延びてた血糊を吹き出すチューブを引き剥がし店から蹴り出す。

「スクライア一族にとっては御褒美です」

何か言ってるが無視する。

定期的に来て冷やかして帰る。嫌な知り合いだ。知り合いか？
知り合いとは思いたくない。

「店長片付け手伝ってくださいね」

真美ちゃんは今日も冷たい、泣きそうだ。

変態を追い返し昼食の準備をする。

因みにこの時着けているのは青いエプロンだ。
家事には家事の姿があるのだ。

「カツミイイ！」

背後からルードの叫びが聞こえる。

二人のシフトが入っていたなと思いだし振り替えると髪が燃えてる
カツミが居た………燃えてる！？

「ちよっ！何で！」

慌ててカツミを引っ張り流台に頭を突っ込ませて蛇口を捻る。

「ぶがっ！鼻に水がガボガボッ」とか聞こえるが火が中々消えない
んだから我慢しろ。

「何で焼きカツミが出来そうになってんだよルードオオオ！」

怒りに任せ背後でオロオロしている馬鹿に怒鳴る。
落ち着け、男だろうが。

「違うんす俺悪くないんす！ソイツがレジ打ってたら何を間違ったのか隣にあつたデバイスを叩いたんす！俺悪くないんす！」
慌てて手を振り弁解するルードに頭の血管が切れそうになった。いつの間にかぐったりしたカツミを投げ捨てゆっくりルードに向き直る。

「デバイス叩いて何で頭が燃えんだよ！吐け！何があつた！」

ズンズン近寄りルードの胸ぐらを掴み上げる。

「ヒイイ！？低血圧な店長が大声ぶべら！」

やかましい！好きで低血圧な訳じゃねえよ！
つつい頭突きしてしまい鼻を押さえるルードに一本背負いを決める。

ズドンと音を鳴らしたせいか、店に居た真美ちゃんと緑髪が慌てて駆けてきた。

「うわっズルいよ店長！僕にもお仕置き「何でまだ居るんだよお前はああ！」……てへ？」

苛つくなお前！

唯一の癒しは真美ちゃんだけだよ！

何だよこの負のスパイラル！誰のせいだ！

「店長……」

と、ぐったりしていたカツミがググツと、必死に起き上がり此方を見つめてきた。

「俺が叩いたの……シガーレスです……」

……………へ？

「シガーレスを叩いて割って、魔力が溢れて、しかもシガーレス事態に入ってた砲撃魔法が……頭に向けて……」

……………は？

「非殺傷だったから助かりましたが……熱や摩擦は軽減されずに」

……………あれ？

「……髪が、燃えました」

……………俺のせいじゃねえか！

「悪かった、本当に、悪かった」

俺は即座に頭を下げた。

自分の非をしつかり認めれる大人な男、はいスイマセンだからそんなに睨まないでください真美さん。

「……店長つてまともじゃないですよね」

真美ちゃんが蔑むような目で俺を見ってくる。

やめて、変態じゃない俺にその視線は冷や汗がマッハだ。
そして冒頭の善人は身近に居た。俺だ。

日常2（後書き）

生き抜き感覚でギャグを書きなくなった

今は後悔している、作者はギャグとか苦手らしい
何故書いたし、だけど私は謝らない

店長だって万能ではない

ウツカリシガーレスを置き忘れたりもするのです

つまり店長もミスをする印象付けたかった

それだけの話

次くらいにキャラ辞典を載せます

キャラ辞典（随時更新）

デバイスショップ店長

名前未表記、今後も明らかになるかは不明。

性別は女性だが精神は男なTS系転生者。

一人称は俺。

無量大数なミス殺害記念に百の能力を貰える筈だったのにコントロールが悪く、ダーツを悉く外し【家事の才能】【音楽の才能】【工学の天才】【物真似の才能】【召喚能力】の五つの特典しか貰えなかった。

捨て子であり幼少期はレストランでバイトをしていた。

バイト時代の事件もそうだが、集中すると周りが見えなくなる。

奴（後述参照）との斬新な出会いによりショップを立ち上げる決意をする。

その当時はバニーから与えられた能力の豊富さから、どんな店にするか悩んでいたが、結局デバイスショップで安定した。

八年前、第7管理外世界で起きた転生犯罪者事件、通称TSW事件に巻き込まれた。

それを切っ掛けに三つの条件からショップの設立を管理局及び聖王教会に後押ししてもらう

三つの条件

1、転生者の搜索

2、転生者の敵性判断

3、敵性転生者の捕縛（殺害）

因みにこの条件を満たす為にデバイスショップの名称は【トリッパ―】とし、求人広告の必要資格の欄には転生者と書かれている。

ハクタク・ウワラルク

男性

陸部隊である108に所属している

一人称は俺

面倒見が良く子供好きである

戦闘スタイルは店長特性の杖型デバイスを使った砲撃タイプ

残業ばかりだが店長の誕生日には必ず早めに帰る

もう告白しろよと同僚に言われるが本人はそんな関係では無いと否定。

最近の悩みは部隊内で何でも屋コンビ扱いされてる事。

苦労人

*上記2人は同居中

協力者、仲間

奴

原作介入に悉く失敗する転生者

男

一人称は俺、僕

能力は【無限の剣製】

とことん御人好しで無自覚でパシりに使われたりする。

店長曰く【本当に不憫な奴】

アルバイト組

真美ちゃん

笑顔の怖い転生者

女

一人称は私

能力は【完璧で瀟洒な御奉仕精神】

店長を制御出来る数少ない人間

店長曰く唯一の癒し（パンドラボックス）

カツミ

ドジッ子属性EXの転生者

男

一人称は俺

能力は【絶対的な防御能力】

非殺傷とは言え至近距離の砲撃魔法に耐えられる程に堅い。
ただし髪は燃える

店長曰く既に日常風景

ルード

騒音だけの転生者

男

一人称は俺

能力【不明】

無駄に騒がしく無駄に大袈裟である

かつてお洒落をした店長を口説き顎を砕かれた一人
実は店長ですら能力の詳細を知らない

客、知り合い

ラン

阿呆が具現した馬鹿

トリッパー

女

一人称は私

能力【尻尾がモフモフする程度の能力】
見た目は完璧に八雲藍の長髪バージョン

狐尻尾をモフリたいとこの姿になったが、体が無駄に堅く未だに背後に鎮座する尻尾には抱き着けていない

デバイスはスコップ型インテリジェントデバイス【ユグドラ】
デザインを見た瞬間に顔を歪めた

深緑

前髪パツツンな転生者

歩くギャグ補正

男

一人称は僕

能力【道化たる者】

どMである

変態である

でも善人である

店長の苦手リストに名前を書かれている

初対面では敵対しバハムート、バハムート改、バハムート零式の障壁無視の攻撃に死にかけた。

閑話：初めての殺し

デバイスショップ「トリッパ」が軌道に乗り始めた頃の話だ。月に一度高額なパーツを買っていく客が現れた。

年齢は俺より二、三歳上だろうか、俺の自作パーツや普通なら用途不明の完全オリジナルパーツを中心に買っていくが、パーツの種類がダブる事が無いからデバイスを自作するつもり何だろうなと予測出来た。

買ってしまったパーツには補助魔法等他者に影響する術式を円滑にする為の魔力パスの接続機構等があり、使い手の少ない補助魔導師何だろうとは容易に想像がついた。

補助魔導師はその希少性から専用のデバイスを用意する必要がある。だが、使用頻度の低いパーツは無駄に高く一般の魔導師では手が届かない、それで俺の所に来たのだろう。

何せ補助特化デバイスのパーツは値が張る癖に品質が劣悪だ。

俺の店なら最高品質の品が適正価格で買える。

まあ商会のバランスを崩したく無いから路地裏でひっそり隠れた名店をやっているんだが。

彼のような珍しいタイプの魔導師は何れ俺の店に流れてくる。

（まあ、それにしても）

ここまでの確にパーツを選ばれると何やら気になってくる。

魔導師何て連中は得手してデバイスの中身までは気にしない。

気にしてせいぜいＡＩか機能性だけだ。

どんな構造か気にせず、簡単なりカバリーをデバイス本体に任せ、そして酷使して壊す。

デバイスは武器であり物だ。いつかは壊れる。それはまあ……良い。その時にパーツを取り替えたりすれば大概直るし、だがもし包囲さ

れてる時に壊れたら？もし殲滅任務の最中に動かなくなったら？

そう考えると兵器の中身を理解しないというのは納得出来なかった。今日日戦闘機のパイロットですら簡易整備は出来るんだぞ？

戦場でハンドガンがジャムったからってナイフだけで挑む馬鹿はいないだろ。

正しい知識があればスライドガシャコンで弾が弾かれるのは解る筈だ。

それと同じ、ヒビが入ってもデバイスにはリカバリー機能があるのは先に言った通りだ。

問題はリカバリーが向かうベクトル、普段は内側の魔力収束機構と術式演算システムにそれが向いている。

デバイスの肝だし当たり前だ。

魔力を集めれなきゃ攻撃出来ないし、術式演算出来なきゃバインドも張れない。

いやデバイス無しでもバインド位は張れるが、かなり高度な計算を算出しなければ行けない。

空間把握からの座標固定、魔力の収束率と結合率、体内から外れた魔力の結合率と空気中の魔素との融合状態。

ぶっちゃけかなり優秀な魔導師じゃなきゃ上手くは行かない。

そう考えるとデバイスの内部構造の把握がどれ程重要か解るだろう。戦闘中にリカバリーのバイパスを負担箇所に戻せば簡単には壊れない。

外郭まで直すリカバリー機能を使いこなせない奴にデバイスを語る資格は無い。

そう考えウンウンと頷いてると例の男が目の前に立っていた。

「うおお！……仏頂面でいきなり前に現れんな」

思わず奇っ怪な声を出し周囲の注目を集めてしまう。

一気に恥ずかしくなり火照る両頬を気にしながらついつい無愛想に

対応してしまうのは、まあ御愛嬌だ。

だが男は俺の仏頂面発言が気に入らなかったのか「む……」と唸り眉根に皺を寄せてしまった。

「ああ、良いから良いから、精算すまそうぜ？」

素直に謝れば良い物を、俺は無愛想に言った事を気にしながらも冷たくあしらうように手をふり、男が持っているパーツを奪いレジの鍵を打ち込んだ。

チーンと何処か間抜けな音を鳴らしたレジからレシートとお釣りを渡しシッシッと追い払うように手を振る。

それで素直に帰る男に、何だか度量とか器量で負けた気がして軽く鬱になった。

それから数日も立たない内に男は再び店に訪れた。

普段は月一なのに珍しいと顔を上げ、愕然とした。

男の後ろには見覚えのある……有りすぎる男が立っていたのだから。ゲンヤ・ナカジマ、トリッパの創設に深く関わっている人物の一人だ。

奴からの仲介で知り合い最近では空港テロでシヴァ召喚の要請を諸事情で断つたりもした。

頭の上がない人物だ、色んな意味で。

ちなみに俺の中では親狸mk、2何て呼んでいる。

「何ですかね、ウチの店は潔白ですよ」

嘘です、真っ黒です。

「突っ込み所ばっかりだが、まあ良い……今日はお前さんに頼みに

……いや、実質拒否権はねえから頼みにじゃねえか」

苦笑混じりにカウンター横の椅子に座るナカジマさん、男はその後ろで瞑目している。空気になんな、羨ましい。

「この店に便宜をはかる条件……悪いんだが、義務を果たして貰いに来たぜ」

……嗚呼、そういう事か。

つまりは転生者を捕まえに行けと……そういう話何だろう。ハッキリ言わないのは後ろの男が居るからか、契約に関して知らないのかもしれない、何故連れてきた。

「まあそれは構いませんよ、何処です？」

カウンターの引き出しから最近造った使い捨ての魔力バッテリーを取り出す。

一々握りつぶさなきゃ使えないカード型の装置だ。

魔力が先天的に少ない俺は召喚を遺憾無く使うにはこうゆう装備が必要だ。

……こんな物を造ってたつてのは、やっぱり戦いを覚悟していた……いや、望んでたのかもなあ……

「大一七管理世界に馬鹿みたいな魔力を持った奴がいきなり現れやがった。行けるか？」

後ろの男から資料を受け取りカウンターの上に投げるように渡してくる。

手に取ってみればサーチャーで撮影したのだろう、大量の倒れ伏す局員にのったまだ小さな子供が悠然と此方を睨んでいた。

「……解りました、その依頼、受理しますよ」

資料を何度か捲り小さくため息を吐き出す。

攻撃が跳ね返る。の意味は解らないが、出鱈目で理不尽な能力、間違いない転生者だ。

俺の返答に満足言ったのかナカジマさんは大きく頷き、さっきまでの切れるような気配を引っ込めニヤニヤ笑いながら此方を見てきた。何だよ。

「にしてもお前さん等が既に知り合いとはな、いつからよ？」

……ああ？

意味が解らん、話したのは昨日が初めてだぞ？

お前から何もか言えよと男を見ると目線を逸らされた。

いや……どこか達観したように遠いところを見ている。諦めたのか、そうか。

ていうかコイツを連れてきたのはその為かよ、男どおしとかキモい、今は女だけだ。

「んでえ？式はいつよ？俺も呼べよ？」

とニタニタ笑いながら聞いてくる。

思わず椅子に推進エンジン付けとけばと本気で思った。

てゆつかよ……

「用が終わったなら帰れやー！」

そりゃ俺も叫ぶよ。

第一七管理世界、文化レベルBのこの惑星はミッドに気候が似ている。

むしろミッドより自然に溢れてはいるが、その悉くが汚染された緑鮮やかな死の大地だ。

そんな土地な物だから皆外に出る時はマスクをつけてすごす。

無論、俺も例に漏れず自作のマスクを着けてるんだが、ここで嬉しい誤算があった。

この世界の企業と俺のマスクに関する特許契約を結べたのだ。

これなら非汚染野菜を培養する工場でも造ったら一財産になるかもしれないな。

ニヤニヤが止まらなくなる程に面白い話だが、止めた。

良く考えたら維持費が馬鹿にならないし、コストが掛かりすぎる。

と言うか野菜も外に出たら汚染物質が付着するのだから培養に意味は無い。

一気にやる気のボルテージが下がり宿に戻ろうと踵を返す。

捜査何かまた明日——とそこまで考えて思考が止まった。

額から冷や汗が流れ喉がしゃくり上がった。

初めて感じた剥き出しの殺意に背中が少しずつつ冷えていく。

パキリ

そんな乾いた音を合図に俺は走り出した。

マスクの空調システムは完璧な自信がある、だが顔を覆っているせいか普段より息苦しさを感じてしまい、意外と速い段階でスタミナ

が切れてしまった。

依然として後ろから感じる威圧感に背を震わしながらも逃げ切るの
は不可能と判断し、一気に振り返った。

——っ！？——

異様、その二文字が良く似合う光景だった。

賑わっていた通りに人の姿は無くなり、あるのは人だった肉、肉、
肉、肉、肉、肉。

ほんの一時でそれを作ったであろう男は資料で見たあの男。
色素が抜けていき灰色に近くなった髪に、赤黒い瞳。

口許を三日月型に歪め俺を嘲笑うように肩を揺らしていた。

一番の異様は奴の服装だろう。

Tシャツにジーパンとラフな姿で——マスクをしていない。——
汚染物質の猛威すら度外視した有り得ない服装に寒気が走った。

「なっ……何なんだ、何なんだよお前はぁ！？」

恐怖から無意味な事を問い掛ける。

御互いに敵通しならそんな質問はナンセンスだ。

「誰かと言われてもなァ、俺ァただの壊れた人間だぜエ」

クツと笑いを堪えるような音を口から漏らし、男は無造作に石を蹴
り上げた。

本来ならそんなもの驚異にはならない、先天的に魔力が少ないとは
言え俺にだって障壁ぐらいは張れる。

だがその石はまるで弾丸のような速度で向かってきた。

パキヤアンと乾いた音を鳴らして障壁が砕け散る。

その衝撃に体が仰け反り一瞬男の姿が視界から外れた瞬間、目の前

には男がいた。

元々男が居た箇所は土が捲れ後方に風が流れていた。

男の瞬間的な移動によりダウンバーストが起きたのだろう。

本来は寒暖の差により起きる現象だが、男はその速度を持って大気を下に叩き付けたのだ。

（マジか……よっ！）

身体を捻り迫り来る拳を回避する。

男の拳に触れたマスクが吹き飛び、その勢いのままに首が千切れそうな程の衝撃が身体を襲い俺は吹き飛ばされた。

「中々やるなア……」

「っ……！」

ニヤニヤと笑いながら男が近付いて来るのを感じながら、喉に走る痛みにも首を押さえる。

剥き出しの瞳に小さな痛みが走り、頬や額、首筋が痒く、少しずつ痛みに変わる。

汚染物質に侵食されていく。

「あア？……なアにビクビクしてんですかア？」

男が俺の頭を踏み締める。

クソッ、なまじっか意識が残ってんのが腹立たしい。

（召喚が使いりゃ……こんな奴）

召喚にはある程度魔力が必要だ。だがしつこいようだが俺には魔力がほとんど無い。

そうなるхмаあ……諦めるしか無いのかね。とか考えてしまう。

「……マジで終わるかよ、最短記録でゲームセツトだなア！」

ニタアと嫌な笑みを浮かべながら男が俺の身体を蹴り上げる。

慣性の法則を無視したように真横に飛ぶ感覚と共に五十m程跳び、地面を転がりやつと止まる。

内臓が掻き回されるような感覚に吐き気を覚えながら、力の入らなくなつた身体で起き上がるうと手を地面に付けるが、肘が上手く立つてくれない、カクンと曲がり顔面から土にひれ伏す事となる。

「終わるかア？あア？」

それが何だか無性に情けなくて悔しくて。

「じゃアなア」

振り上げられる男の腕を見つめるしか出来ず……まで。

召喚が使えない？本当に？

デバイスの補助はいらない、あれは転生特典だ。

理不尽な別理の力だ。

足りないものは……魔力だけだ。

降り下ろされた腕にカードを握つた手をぶつける。

厚さ2センチのカードが砕け、俺の腕も在らぬ方向に曲がるが気にしない、気にする余裕は無い。

呼び出すのは、どんな防御もすり抜ける不条理な怪物。

「来い……バハムート……」

カードから溢れた魔力を無理矢理集める、空間に魔方陣が浮き上が

りそこから巨大な龍が現れた。

男はそれを茫然と見つめ、薄く笑みを浮かべる。

「……ゲームオーバーは、俺かア」

男の言葉は閃光にかきけされた。

それから数日後に、俺はミッドの医療施設で目覚めた。

ナカジマさんが来て謝罪をしたり、ナカジマさんの奥さんがナカジマさんを怒ったり、奴が見舞いに来て「あっ……今日はあのシーンが……」と、また原作介入に失敗したりと本当に色々な奴が来た。

最後の最後で、アイツが、ハクタクが来た。

申し訳なさそうに眉を寄せながら椅子に座る姿はガタイに似合わず、気持ち悪い。

「……すまない」

何がやねん。とは言わなかった。

流石に俺にも空気は読める。ナカジマさんに全て聞いたんだろう。止めるべきだったとか、そんな話だ。

馬鹿馬鹿しい。

「あー、まあ気にすんな、俺は生きてる。それで良いだろ」

ニカツと笑ってやるが爛れた頬がヒリヒリして直ぐに笑みが崩れた。
ダセエ。

「だが……いや、そうだな」

ハクタクは困ったような曖昧な笑みを浮かべながらだが、今回の事は気にしないようにしたらしい。

それに満足すると、急に眠気が襲ってきた。

小さくおやすみと呟き、ゆっくりと目蓋を閉じた。

それから少しして、ハクタクとの同居が始まる事になる。

閑話：初めての殺し（後書き）

ハクタクとの出会いの話

因みにハクタクとの同居にもちゃんと理由があります

あと、アンケートを取ろうと思うのですが

- 1、ハクタクと結ばれるか
- 2、ヒロインを作るか
- 3、恋愛は無しか

因みにハクタクと結ばれるなら少しずつ思考を女性寄りにして行きます

男に惚れる男の心情が解らないので

日常3

「ハーレム系の作品の鈍感と言うのは必然何だよ」

今俺の目の前には九尾の馬鹿がいる。

狐なのに馬で鹿とはこれいかに。

「普通に考えて複数の異性から同時に好意を寄せられると言つのは精神的重圧であり」

目の前のバナナジュースに入った氷がカランと音を鳴らした。

今現在俺達は喫茶店でお茶をしている。

まあお茶は飲んでないが。

「つまり鈍感は精神の均衡を保つ為の防衛本能で」

空調の効いた店内にいと寒くなってきた外に出るのが本当にいやになる。

このぬるま湯のような心地好い空気に永遠包まれていたい、と、そう考えてしまう。

「更には人の好意に敏感な主人公だと、邪に見えてしまい作品全体の品位が」

たまの休日と街に来てみたが、対して面白いものも無く現在に至る。ついついバナナジュースのストローから二酸化炭素を送り込む。中毒になつてしまえバナナジュースよ。

「よって！鈍感とは必要なスキルなのだと私は考える……どうだ？」

「ああそうだな、五月蠅い」

机の下で隣に座るランの足を踏む。
対したダメージは無いのかシユンと耳が垂れ下がっただけにとどま
った。

「あー……平和だ」

カウンターに顎を乗せ瞳を閉じる。
目の前にあったスコットをその体勢のまま頼張る。
ランに行儀が悪いとたしなめられたが知ったことが。
たまの平和を楽しんで何が悪い。

「そうそう、このデバイスだな」

ランはそう言って右手首に巻き付けたスコープのアクセサリを見
せてくる。

「……報告以外喋らないんだが本当にインテリデバイスか？」

略すな、そんなんだから馬鹿だと言われるんだ。
狐なのに馬で鹿とはこれいかに。

「気に入らないのか？」

顔だけランに向け聞いてみるが、まあ気に入らないだろうな。

「今なら俺だつて失敗だったと思ってるよ」

ランがうんうんと頷く。

「スコップじゃなくてドリルにすべきだった」

ランがずっとこけた事により後ろを歩いてた他の御客が尻尾に巻き込まれた。

何をやっとするんだお前は。

「——っ！違うだろ！もつと格好良いのがあったらっ！？」

ランが机をバンと叩き意見してくるが、笑わせるな。

ドリル以外の土に絡めた格好良い武器何か無い。

だいたいベルカ騎士でも無いお前に武器型のデバイスを渡したのは頼まれたからだ。

少しは妥協しろ。

「ああ、平和だ」

「聞いてくれ！」

また机を叩く。今度は両手で。

やめろよ他の御客さんに迷惑だろ、等と考えながらチラリと顔を真っ赤にして怒り狂うランを一瞥する。

「んーあー、でもよ、スコップって万能だぜ？叩いてよし、突いてよし、斬ってよし、掘ってよし、埋めてよし、洗えばフライパンにもなりそのスコップは砲撃まで出来る」

何だ、文句の付けようが無いじゃないか、いったい何が不満なんだ。ヤレヤレと言わんばかりに首を振るとランは何かを諦めたように溜

め息を溢し元の椅子に座り直した。

「実用性ばかりで見た目を気にしないのはお前の悪癖だ」

愚痴るように、というか事実愚痴を吐き出す。

本人の前で言うなよ。

だいたい見た目も気にしてるぞ俺は、刃の部分には波紋が走ってる
し銀の装飾が輝いてる。

六角柱の持ち手何かスタイリッシュじゃないか。

「素晴らしい見た目だろ？」

「お前のセンスが素晴らしいな」

嫌味で返された。

どこか疲れたように溜め息を吐き出す。

美人は美人だから様になるが、この胸のムカム力は何だろうな。

「だけど今更形を変えんのも可哀想だろ、そいつにだって人工では
あれ心があるんだから」

と、俺の発言にバツの悪そうな顔をするが直ぐに何かに思い切り首
を傾げた。

「ってだからコレは喋らないんだって！」

と、本来の文句を思いだし机をバシンバシンと乱打する。
その度に店員の視線が険しくなるんだが俺には止められない、止め
る勇気は無い、男は元来キレた女に弱い生き物なのだ。

「あー……無口なんだよ」

まさか喋らない性格に作りましたとは言えない。
何だよデバイスと交流持ちたいなら最初からそう言えよ。

「無口！？過ぎるだろ！受け取った夜の私はアクセサリーに独り話し掛ける寂しい女だったんだぞ！？」

まだ叩く。

ドンツと音を鳴らした瞬間に机が陥没した。

周りの目が段々と白く陰しくなる。

背中に冷や汗が流れるのを感じながら辺りの視線から逃れるように立ち上がり代金を払う。

バナナジュースのグラスに口を付け一気に飲み干し、ランの襟首を掴み急いで喫茶店を後にした。

「おい離せええ！？」

ぐえと不穏な声が聞こえたが無視する。

彼処のバナナジュースは美味しかったのに何て事を……もうあの店に入れないじゃないか。

怒りに任せてランを投げ捨てるように解放する。

腕力が余り無いので両手で投げてても対して飛ばない。

というかベチャツと擬音がしそうな位投げた手の真下に落ちた。

「……キュウ」

狐らしい鳴き声をあげて目を回すラン。

「……おい？……ちよっラン！？おい！」

結局この休日はランの介抱で完全に潰れた。
自業自得だろうが……何だか納得いかない。

日常3（後書き）

アンケート結果

1と3が多かったです

3の方が納得の理由が多かったり、作者自信も恋愛を絡めるよりほのぼの日常と開発、たまに戦闘と言う今のスタンスがやり易いので3にする事にします

ただ1も以外と需要が有ると言うのが解ったので
いつかIFストーリーとして書いてみようと思います。

百合百合しい展開は、いやむしろNL何ですが

とにかく2に関してはあまり居なかったので完全にボツにしました

2に入れてくれた方は申しわけありません、陳謝致します

3に入れてくれた方は今後ともよろしく願います

1に入れてくれた方は楽しみにお待ちください

では、次回もよろしく願います

日常4

目が回る程に忙しい一日だった。

シヨップは満員になり、デバイス開発の依頼が二十も舞い込んだ。た。

カツミは倒れるしルードは叫びすぎて喉を潰し、たまたま休みだったランと奴に頼み込み手伝って貰い事なきを得たが。

あの真美ちゃんですらレジ打ちを間違うほどに大変だったのだ。

「……何だ、どうした」

ハクタクが帰宅し生活スペースに戻るなり口にしたのはそんな言葉だった。

それも仕方無いだろう、俺以外の全員が横になりグロッキー状態なのだ。

変態（緑髪）の無駄な素早さがあればまだ楽だったが、あの変態店の惨状見るなり逃げ出しゃがった。

ランとかうつ伏せになってるせいで黄色い何かにしか見えない。

「おかえり、おつかれ」

苦笑混じりに缶ビールを掲げる。

ハクタクが倒れた皆を踏まないようにしながら近付いてきた。

「ただいま、それで何だこれは」

椅子にぶら下がるように呻いていたルードを退かし椅子に座る。その質問をする気持ちは解るが、何と言えば良いのか……なあ？

「ハハッ……今日は忙しくてな」

乾いた笑いを溢しながらも笑みを作るが、如何せん強張った物になった。つてしまった。

「忙しい？……この店が？」

ハクタクが信じられない事を聞いてしまったとしても言わんばかりに眼を見開く。失礼な。

そりゃ隠れた名店とは銘打っているが、名店である事に違いは無いだろ。

「忙しい…か…どれだけ忙しかったらこんな風になる」

そう言いながら流し目で死屍累々と形容できる皆を眺めていく。その瞳には明らかな憐れみの感情が浮かんでいた。

「デバイス開発依頼が二十入るくらいだな」

「二じゅっ……！？」

何気無く言った言葉にハクタクがまたも目を見開く。
今日は驚いてばかりだなお前。

「ハア……平気か？」

少し落ち着いたのか小さく息を吐き出し呆れたような顔ではあるが、どこか心配するように聞いてくる。

「いや、正直キツいな、ギリギリだ」

まあ、強がっても意味は無いので素直に弱音を吐いてみる。

今日急ピッチで組めたのは二つ、五日以内に後十八、ともなれば苦笑も漏れるというもの。

大体にして本来なら今話している余裕すらないのだ。

本来なら工房に籠るべきなのだろうが……俺だって心が折れそうになっったりもする。

「……平気か？」

……多分だが、こんな所に居てという意味だろうな。

いや、解つてはいるのだが、工房に戻るとどうしても仕事量に辟易してしまうのだ。

「平気……ではないが、もはや仕方無いと考えるしかない」

もはや引きつった笑みすら浮かばない、完全な真顔だ。

空気だけならシリアスだが、内容が忙しさに追われ、受注依頼の数を確認していなかった自分自身の自業自得が原因なのだから、何とも間抜けが過ぎる。

「……開発を手伝えればな……」

ハクタクが申し訳無さそうに言ってくるが、今回ののは完全に俺が悪いのだから仕方無い。

「ハハッ……気にす……それだよ！」

軽く落ち込むハクタクの肩を叩こうと伸ばした腕が止まり、それに怪訝な表情を浮かべたハクタクに指を指した。

「そうだよ、手伝ってくれる奴がいらないなら作りや良いんだ」

一人納得し腕を組みうんうん頷いていると、ハクタクが何とも言えない……強いて言うなら困惑したように目をパチパチと開閉する。

「そうだよな、何も機械に機械を造らせちゃいけない道理何て無いんだから」

そうだ。ここまで言えば誰でも気付くだろう。

ハクタクも本気かと言わんばかりの視線を向けてくる。

「無論、本気だ」

キツパリと言い放ちハクタクの肩を叩くために浮かした腰を、ドリと椅子に落とす。

つまりはロボットを造ろうと言うのだ。

ガンダム〇〇のハ口のように俺の作業を補佐するロボットを。

「こうしちゃ居られない、直ぐに作業に入らなきゃな」

俺はルンルン気分で工房に足を運んだ。

途中で柔らかい何かを踏んだり「ぐえ」何て聞こえたが今の俺は気にしない。

黄色い何かが泣いていても気にならない。

補助ロボ開発

開発及び整備用補助ロボットを造ると決心した俺は直ぐ様工房に籠り、大きな白紙を取り出した。

だがそれに向かい合いながらも一つも構想が思い浮かばなかった。何せ今までの発明はデバイスという基礎が存在し、そこから発展させたような代物ばかりだったのだ。

1から造る、というのは何気に初の試みであり自然頭を悩ませる事となる。

「……開発補助……ロボットアーム、は何か違うよなあ……」

うんうんと唸り頭を悩ませながら次々に白紙に案を書いては塗りつぶしていく。

一応個人で使う物だから見た目は俺好みで武骨でニヒル、ダンディな空気を纏ったナイスガイであるべきだ。

となるとどこぞの『ダラシネエナ、ダラシネエナ』とか『ユガミネエナ、ユガミネエナ』等と片言で同じ言葉を二回繰り返す球体で緑やピンクなロボットなんぞ論外だろう。

やはり格好良い形と言えば六角だ、六角柱なら尚良い。

だがあまり六角柱ばかり作っていたらまたハクタクにセンスが残念な奴を見るような視線で見られてしまう。

あれはなけなしのプライドに傷が付くんだ。こんなんでも（自称）お洒落さんな訳だし。

「となると、やはり卵型だろうか……」

周りに言わせれば球体が駄目で卵型が良い理由が解らないと言われそうだが、全然違う。

先ず球体はただ可愛いだけだ、ピンクの吸引力が変わらない唯一つの球体を見れば解るだろう。あれには可愛さしかない。いやまあ俺も大好きだが。

更に言えば自爆が得意な何ちゃってモンスターボールなあんちきしょうや礫じゃすまない石なあんちきしょうとか、兎に角丸は駄目だ。それに対して卵型は素晴らしい、天空の城のロボットだって待機状態は卵型だ………はっ!?

「変形……だと…?」

俺はニュータイプさながらに頭に何かの光がギューピーンと走るなり台紙を広げ変形と書き込んだ。

「俺は……長い異世界生活で男の浪漫を忘れていた」

懺悔のような、慟哭のような、そんな悲哀の籠った声音に驚いたのは誰よりも俺自身だった。

変形の二文字を見つめながら知らずに紙を握り締める。言い訳させて欲しい、俺も疲れていたんだ。

「こうなれば……もはや変形の内容は必要だろう」

そう、デバイスのようなとんでも変形等では無い、理路整然とした素晴らしい変形をだ。

だが人型は駄目だ。そんな物は補助ロボットとは呼ばん。補助目的で変形……多脚しか有り得ないだろう。

そう、卵型が変形し多脚になる。

そこにはきつと浪漫が詰まっている。

「ふっ……クククッ……やあってやるぜえっ!!」

目の下の隈に気付かず俺は叫んだ。

数時間後、必要となるであろう材料を店や工房を引っ掻き回し集めて周り作業台にどかりと置いた。
普通に考えたら作業台に置いたら邪魔にしかないのだが振り切れたテンションでは気付かない。

「まずは骨格を作ってやる……」

ドリルとサンダーを握りしめ素材となる合金の棒を見詰める。

疲れて上手く働かない頭が作業に入った瞬間に冷静になっていくのは流石は転生特典と言う事だろうか。

ドリルで削り細くしていき、サンダーで粗を削る。

八時間かかり何とか素体となる骨組みのパーツは完成した。

専用の機械でも使えばもっと速く仕上がるのだが、工房の広さの問題で手で出来る作業は手で行っている。まあ技術チートは流石と言うべきか、手でも正確に削り出しが出来るのだから世の技術屋泣かせだろう。

六時になって外がすっかり明るくなってきてるなと考えながら伸びをする。と立ち眩みがした。

どうやらまた集中し過ぎていたようだ。

ハクタクの小言は嫌なので素直に部屋に戻り仮眠を取る事にした。
生活スペースで横になる5人を起こし、管理局関係者の奴と狐を送

り出し三人に店を任せると伝える。

その後朝食を軽く作りハクタクを起こしに行く。俺はお前らの父親かと突っ込みたくなる。

作業は始まったばかりだ。

大事な何かを忘れたまま……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1982ba/>

魔砲少女の世界でデバイスショップ

2012年1月13日21時23分発行